

# 「生きて働く読解力」の育成を目指す指導法の研究

～目的をもって、情報を関連付けて読み、考えをまとめる力を育てる授業づくり～

## いろいろな説明文を読み伝えよう

福島市立瀬上小学校 佐久間 裕之

### 1 はじめに

4月の頃、3年生の子どもたちは、長々とした話を聞かせてもなかなか聞いてくれないものである。しかし、それがもしこわい話や冒険的な楽しい話だったりすると別で、聞きもらすまいとして目を見開いて聞き入ったりする。授業の中でも、ある子の発言を境に教室全体がぐっと身を乗り出して聞くような場面が偶然的に訪れることがある。あれは、なぜだろうか。誰かが何かを発言しているときに漫然とした聞き手が聞くともなく聞く状態と、聞き手が引きつけられているときの差について考えたい。

ほとんどの子が積極的に誰かの話・発言を聞いているという場面、そうした状況の成立には、「聞くことの必然性」とでも呼べる要素が存在するように思える。私たちは、どのような時、意欲的に耳を傾げるのか。このあたりから何らか重要な要素を抽出することはできないか。読むことを通して「聞きたい」「話したい」状況を構成できないものかと考えた。

### 2 「話したり聞いたり」したくなる必然性とは

自分だけが詳しく知っている分野があり、周囲の人が「それをぜひ知りたい・教えてほしい」と願っているような状況があるとす。そのような条件下では、話し手のみならず、聞き手にも密度の濃い時間が訪れる。

マジックを見て驚いた後、タネ明かしが始まると観客がつい引き込まれるのは、相手の欲しがる情報を与えているからである。学校での出来事をうれしそうに語る子どもの話、祖父母が目を細め聞き入るのも、聞くことがうれしいからであろう。

個人個人の情報の量や質の差や要求が生むこのような状況にあれば、人は話し伝えることに喜びややりがいを感じるものである。聞き手が知りたがる情報を、話し手側が伝える状況の構成を意図して実践を試みた。

### 3 読みたいと思わせるトピック性重視の紹介

教科書会社に掲載されてきた新旧の説明文教材から、子どもたちの関心をひきそうな話題性のある教材を多数選び、どんな分野の話が書かれているかをごく一部紹介する。内容の詳しいところは決して知らせず、「主にこのような話題が書いてあるよ」とトピック性の高い部分だけを謎めかして紹介する。例えば「今、その水槽で魚が泳いでいるけれど、魚ってえさを食べる時、人間みたいに味がわかっているのかなあ。酸っぱいとか、しょっぱいとか少しは味わっているのかな？」などと語りかける。「さあどうだろう？」と投げかけ、予想させる。いろいろと聞いた後、結局答えは教えない。読めばそれらが明らかになるとして次の説明文の紹介へと移り、子どもたちがもともと持っている知識欲を触発する。そのような語り口で多数紹介していく。子どもたちはどれか一つの説明文を選んで読むルールである。

自分が選んだ説明文を読んだら、要点をまとめ、あらましを再構成して、読んでいない人に伝える。その時、なるべく面白く興味深くなるように、クイズが始まるとか、図解したポスターを掲示して話すとか、実物をかざしながら話すとかいうように、アピールの仕方を工夫する。ここには、文章のアウトライン把握、概要の再構成、話す・聞く力の関わり、プレゼンテーションとしての技術などがキーポイントとして含まれる。「聞きたい・早く答えが知りたい」と求める思い、そして

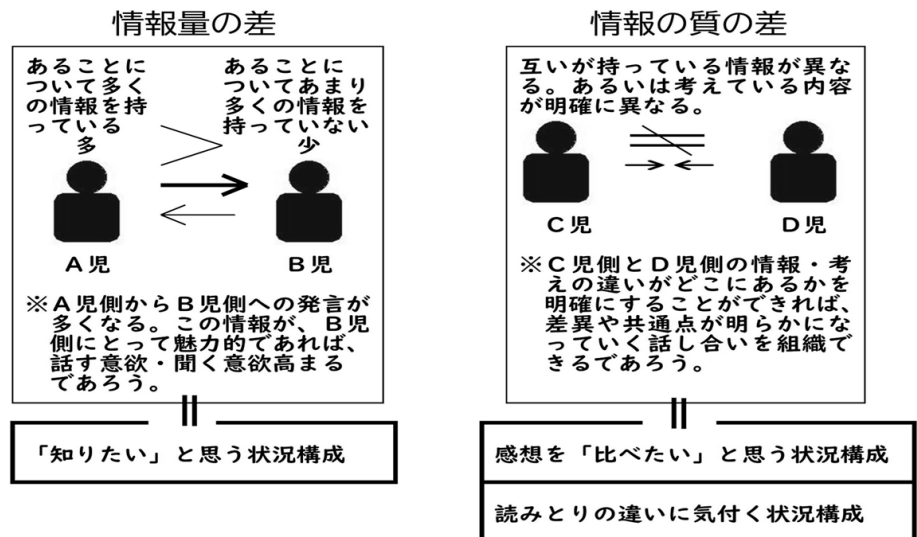
「話したい」、「自分はそれを知っていて、相手がそれを知りたがっている」と外へ発信したい思いが交錯する。発信を前提とした読み方になる。情報をもつ者ともたない者との凹凸の関係が生み出している状況と言ってもいい。

このようにして、聞き手の児童は、早く知りたいと思っていた「目隠ししてもぶつからずに泳ぐイルカの不思議」とか、「魚は、はたして甘い・酸っぱい・からいなどの味が分かるのだろうか」とか、「おへそにはヒミツがある」とか「生たまごとゆで卵を一発で見抜く方法」などの答えを期待感をもち聞こうとしている。話し手の児童は、伝える楽しさやいくらかの優越感を感じつつ、わかりやすく話すとともに、聞き手を引っ張り込んでやろうとする話し方を工夫したくなる。しかも、理解を助ける図解資料であるとか、あるいは実物のたまごなどを提示しながら話す。SHOW&TELLである。「話す・聞く」活動は、いきなり全体の場に立つのではなく、まず同じ説明文を読んだ少人数グループにおける対話から始める。要点や中心を確認し合った後は、いよいよ大勢の聞き手に対して話す。この学習に先立ち、第一次の学習では、文章の要点をまとめる学習を重点的に行っている。「自然のかくし絵」をもとに、文章の中から「中心となる語や文」を発見し選別する話し合いを重ね、概要を図解してみる学習を行った。

「考えをかかわらせる」ための＜学習状況の構成＞モデル  
— 個々の児童が持つ情報の面から —

4 なぜ「話す」のか、なぜ「聞く」のか(右上図)

「話したり聞いたりする」ための情報的な側面と意識の側面から、三つの状況のモデル(図)を設定した。先の実践例は、図の状況構成に関連付けた授業の一例である。



5 おわりに

伝えることを前提として説明文を読み、内容を整理していく実践例を紹介した。互いの考えを関わらせながら、情報を交流し合う学習であり、上の図の＜情報の差＞に当たる実践である。あとの2つの＜情報の質の差＞＜情報の個人内価値の差＞に焦点を当てた実践は次回以降に示したい。「考えの差異や共通点を明らかにする説明ができる」分析力が重要になると考えている。

